

---

# そして世界が終わった頃に.....

モンスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そして世界が終わった頃に……

### 【Nコード】

N2005Z

### 【作者名】

モンスター

### 【あらすじ】

我々は長い間の平和な暮らしの中で当たり前に感じていると思う。だがそんな当たり前な世界が突如、地獄へと変わったら人々は生き残れるだろうか・・・人類滅亡へのカウントダウンスタート！

## 第0章 始まり（前書き）

久しぶりのオリジナル小説です。完成度の高い小説を目指します。

## 第0章 始まり

皆は今の生活が普通のことだと思っているだろう。  
長い間この生活を続けていたら誰だってそう思うだろう。  
だがそんな世界は一つの出来事により崩壊した・・・

12月30日 PM11時 東京のあるアパート

どこからかドアを叩いている音がした。

その男が目覚ますと確かに玄関のドアを叩いてる馬鹿がいた。

「クソ、誰だ？こんな時間に」

男は玄関まで行くとドアを開けた。

「おい！うるさ・・・い・・・ぞ・・・」

いきなり肉が腐ったような匂いがした。

それもそのはずだろう・・・目の前には全身血だらけの男が居た。  
目は白目。

腕は変な方向に捻じれ、さらにはその肉は腐っていた。

「お、おい！近寄るな！」

だが奴はお構いなしに俺へと近づいてきた。

奴が近づくとたびに臭いはひどくなった。

なんとか部屋の中に戻ったがあることに気づいた。

玄関の扉を開けたままなのを・・・

案の定、奴は入ってきた。

「や、やめろ！うわーーーーー」

奴は俺を押し倒し腕を噛み始めた。

最後に見えたのは噛みちぎられた俺の腕だった・・・

その後男を喰い殺し、悲鳴を聞いてやって来た人々を喰い殺して

いった。

たつた一体なら無理だろうがそれは問題ではなかった。

なぜなら奴らは噛めばそいつを仲間にできるから。

アパートから出ると真っ直ぐにマンホールの場所に行った。

マンホールを開けるとそれは中に入っていた。

これは今後起きる大事件の小さな始まりだった・・・

## 第0章 始まり（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

## 第1章 異変（前書き）

登場人物を募集するので出して欲しいキャラを送ってきてください。  
良かったら採用します。

## 第1章 異変

東京・立川市 12月31日 AM7時

この日も俺は朝から起こされた。

(全く……大晦日だっていうのに)

こんな大晦日の日に朝早く起こされたのには訳があった。

昨日、母さんに病気でお婆ちゃんが倒れたと聞き、今日は大晦日  
だけどその看病に行くのだ。

寝ぼけながら階段を降りていった。

俺の家族は、母さんと二人暮らしで父さんは小さいときに死んで  
しまった……

車の事故だった。

リビングに入ると既に母さんが外行きの服に着替えていた。

「翼、起きたのね」

俺……遠藤翼は、冷蔵庫からミルクティーを取った。

俺は、実は、ティー系が大好きでこれまでずっと飲んできた。

「は、相変わらずだね。それはそうと……今から九州に居るお婆ち  
やんの所に

行くから。母さんが居ないけど大丈夫よね？」



「大丈夫だって。俺もうすぐ大学生だぜ」

それは本当の事だった。今高3で、4月になると大学生になる。そしてこの家から出ていき一人暮らしを始める予定だった。

「そうだけど……最近この辺りで謎の殺人事件が起きてるでしょ」

最近起きてる事件というのは、人がどうやったらこんな風になるのかというほどの

有様だった。なぜなら全身から噛みあとが発見されたり警察は野犬の可能性も

指摘していた。・・・まあそんなことはある訳ないのだが。

「それより時間は良いのか」

母さんは壁に掛かっている時計を見た。

「まあ！もうこんな時間。もう行ってくるから戸締りちゃんとしてね」

それだけ言うと声をかける前に部屋から出ていった。

（はあ〜暇だな・・・そうだ！あいつらを呼ぼう！）

あいつらとは俺の友達、一人目は神山和俊。俺達のムードメイカーだ。

二人目は石井翔。俺達の高校のナンバーワンと言ってもいいほどのイケメンである。

早速電話をかけた。二人とも快くOKしてくれた。

20分後・・・

ようやくチャイムが鳴った。

玄関の扉を開けると和俊と翔が立っていた。

「おう！翼」

「久しぶり！翼」

二人を中へと入れると俺たちは二階へ上がった。

「例のものは持ってきてくれたよな」

例のものとはただのPSPだった。

「ああ、持ってきてるぜ！」

「俺もだ」

二人ともPSPを出した。

今から何をするかというと・・・

「じゃあモンハンやろうぜ！！」

しばらくモンハンをやり続けた俺たちは時間が経つのを忘れるぐらい熱中していた。

外の異変にも気づかないままに・・・

「よし！クエストクリア！」

クエストをクリアした俺たちは俺の提案でPSPを一旦止めた。

「そついえば今何時だ？」

翔が言ってきた。

「ああ、えーと今は・・・2時だな」

そこで和俊が突っ込んできた。

「夜中の？」

「なわけねーだろ！昼のだよ」

そうだ！二時から観たいテレビがあつたんだ！

「ちょっとテレビ見るぞ！観たいドラマの再放送があるんだ」

テレビをつけるとドラマはやってなく、緊急放送とテロップが入ったニュースをやっていた。

「何だこりゃ・・・」

そこにはありえない映像が映っていた・・・



## 第1章 異変（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

## 第2章 蘇り始めた死者

テレビで流れている映像は驚愕のものだった。

東京・テレビ局

「練馬区や立川市で起きている暴動について情報が入りました。政府の発表によると一度死んだ人が蘇って人を襲っているとのことです」

そのテレビのアナウンサーは半信半疑な感じで言った。

「死者が蘇った理由として政府は、化学兵器説、魔術説、侵略説などなど多数の説が

上がっていますが理由は不明です。さてこの蘇ったとされる死者は足は遅く、目は白目、

全身の肉が腐っており一目見ただけで分かりますが、蘇った死者たちは物凄い数です。

決して練馬区や立川市へは近寄らないでください。その辺りに住んでいる人々は、

最寄りの避難場所へ行くか、東京を出るかそれとも家で鍵をかけて決して外には

出ないでください。繰り返します」

「……今死者が蘇ったとか言ったよな……しかもここや（立川）や練馬区って……」

「エイプリルフルじゃね？」

「あのな、今日は12月31日の大晦日だぞ。明日は新年なんだぞ」

俺が突っ込み翔が口を開いた。

「さっきのことが本当か確かめる方法があるぞ」

「ホントか!？」

「ああ、この家から外を見たら分かる。本当に死者が蘇っていたら外もそれなりの騒ぎになってるだろう」

「さすが翔!」

とりあえず部屋の窓を開けた。

「マジかよ……」

外は地獄の様だった……

死者が人を喰ってたりそこらじゅうに血だまりが出来たりしていた。

その時銃声が聞こえた。

「おい!あれを見る」

奴らに居場所がバレないように小声で言った。

警官が外で死者に向け発砲していた。

「助けるか？」

和俊が言ったが俺はまだ様子を見ようと言った。

銃弾は死者たちの腹などに当たるが動きが少し止まるだけで警官に少しずつ

近づいていった。その内、警官の銃の弾が無くなり入れ替えようとしたときに

死者に囲まれてそのまま押し倒され噛み殺された。

これ以上見てられない状態になり窓を閉めた。

三人は、床に座り込んだ。

「これからどうする？」

「俺は家に帰ろうと思ってる」

和俊が良い翔も「俺も」と言った。

「分かった。まずは親に電話してみたらどうだ」

二人とも一斉に携帯で電話をかけた。

俺も母さんに電話するために一階に置いてある携帯を取りに行った。

携帯を取ると母さんの電話番号を押した。

「ただ今、大変電波が込み合ってます」



母さんは出ず機械の音声が聞こえた。

「ちくしょー！」

携帯を投げ捨てそうになり慌てて止めた。

その時二人が降りてきた。

「ダメだ……繋がらねー」

どっちの携帯も繋がらなかったようだ……

「俺の母さんは九州に居ると思うから大丈夫だが、お前らはどうする？」

「俺は、今一人暮らしだからな。両親は埼玉に住んでるから大丈夫だろう」

翔は良かったが和俊は違った。

「俺は家族がまだ家に居るんだ」

「そうか……なら助けに行こう。良いよな翔？」

「ああ、ダメと言っても行くんだろう」

「その通りだ。とりあえず武器になりそうなものを持ってこよう」

とりあえず武器を集め始めた。その結果が金属バットを二本と、

木製バットが一本だ。

なぜこれだけバットがあるかという俺が野球部だからだ。

「俺が金属バットを持つからあとは勝手に決めてくれ」

和俊が金属バット、翔が木製バットを持ち玄関に向かった。

「よし、行くぞ！」

ドアを開けようとしたとき隣の部屋の窓ガラスが割れる音がした

……

## 第2章 蘇り始めた死者（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

### 第3章 情報

窓ガラスが割れたのは隣のリビングだ。

「和俊、翔、行くぞ！」

一気にドアを開けた。そこには窓ガラスを破って侵入してきた死者が居た。

死者は俺たちに気づくと襲ってきた。

「来んじゃねー！」

鉄バットでホームランを打つようにフルスイングして死者の腹に浴びせた。

死者は吹き飛んだが再び立ち上がった。

(おかしい……確かに骨が折れた感覚がしたのに)

再び襲ってきた死者に今度は柵から落ちてきた野球ボールを顔面に投げつけた。

彼はピッチャーであったから肩を温めてなくても130キロはあった。

顔面に命中し死者はあとずさったがそれでも死者は近づいてきた。

「クソ！どうすれば止まるんだよー！」

怒りに任せて死者の腕にバットでフルスイングした。

今度は腕が折れる感覚がした。

腕がブランとなってもまだ近づいてきた。

その時、小さいときに見たゾンビ映画の知識を思い出した。

「お前ら！こいつの後ろに回って気を引いてくれ」

翔と和俊がうしろに回って気を引いた。

「おい！クソヤロー！こつち向きやがれ！」

死者が和俊の方に振り返ると俺は死者の後頭部にバットを叩きつけた。

頭が割れ、死者は2度目の死を向かえた。

「ハア、ハア、終わったか……」

床に座り込んでしまった。

（初めて誰かの命を奪ってしまった……）

「翔、和俊、窓にバリケードを造ってくれ。当分立ち直れそうにな  
い」

座りながらテレビを点けた。

ちょうど総理の会見が行われていた。

「既に同じような現象は日本中、いや世界中に広がってます。全人類は全滅の危機にあるのです！」

東京はほとんどの地域が壊滅し、機能を停止してます。一刻も早く東京から脱出してください。

政府は沖縄に移動されます。東京から脱出できない場合は、自衛隊の駐屯地または避難所へ行ってください。以上で会見を終了します」

その時気づいた。我々が長い年月をかけて造り上げた世界が急速に終焉へと向かっていることを……

「翼、終わったぞ」

割れた窓の所には棚や机が置かれてた。

「このまま和俊の家族を助けに行こうとも今のままでは外へ出れば5分ももたないだろう。」

だからテレビやパソコンで情報を集めるべきだ」

「ダメだ！それなら俺一人で行く」

和俊が一人で行こうとするのを翔が止めた。

「待て！今一人で行くのは自殺行為だ。さっきのを見ただろう。一体でも苦勞する相手が外に行けば数百人は居るぞ！もし俺たちがこの状態で行って死ねばお前の家族を助けるのも永遠に無理になるんぞ！……」

翔の言葉は和俊に聞いた。

「分かった。好きにしろ。だが最高でも一時間だぞ」

翔は笑いながら言った。

「ああ。それまでには終わる」

一時間後……

パソコンやテレビでたくさん情報が手に入った。

それを簡単にまとめてみよう……

1、死者（ネット上ではゾンビと呼ばれていたためこれからはゾンビと呼ぶ）は、知能は無く目は見えない。

だが以上に耳と鼻が発達しておりさらに大抵そばには仲間がたくさんいるので物凄い驚異となる。

弱点は頭でありその他の部位をいくら攻撃しても倒れることはない。銃弾を腹に何発も浴びても倒れなかったという報告もある（確認済み）

噛まれるだけでゾンビの仲間入りするので噛まれたものは置いていくか殺したほうが良い。

2、ゾンビ出現により東京はほとんど壊滅しており政府は沖縄に移された。

自衛隊は避難所や駐屯地、発電所や原発、その他重要な地域を守るのに精一杯で救助に来ることはまずない。

3、世界中で同じような現象が起きており外国に逃げるのは得策ではない。

無人島や離島に逃げるのが得策だろう（避難所は多数の人間が来るのでそれにまぎれてゾンビが来るのでやめておいたほうが良い）

4、東京で略奪者や頭のイカれた者たちが確認されてるので注意したほうが良い。

5、これから食べ物が入るかが不明なので家にある保存が効く食べ物を持っていったほうがいい。武器はリーチの長いものが良い。近づけば近づくほど噛まれやすくなるからだ。

とまあこれだけの情報が手に入った。

三人はダウンを着て用意した食べ物をカバンに入れ武器を持った。

時計を見ると4時になっていた。

「よし、行くぞ！」

俺は玄関の扉を開けた。



### 第3章 情報（後書き）

次回、別目線から始まります。

## 第4章 到着（前書き）

今回は陸自隊員と三人の話です。

## 第4章 到着

東京練馬区 12月31日 PM1時

翼たち三人がモンハンをしている時……

俺、神崎優斗は陸自隊員であり今日は休暇だった。

いつもは訓練に励む時間も今日はゆっくり出来た。

だがそのせいでとても暇だった。

(さて……暇だな。そうだ！散歩でもするか)

玄関の扉を開け外に出た。

目の前を血まみれの女性が走っていった。

そのうしろをさらに血塗れの男女が追いかけていった。

肉が腐ったような匂いがした。

(何だ？今のは)

彼は見過ごすか迷ったがそこは自衛官。女性を追いかける男の一人の肩を叩いた。

「止まれ！！何者だ！？」

ものすごい腐肉の匂いがした。

その男が振り返ると腕に噛みつきこうとした。

ギリギリのところその男をよろめかせた。

男は何もないところで歯を「カッン」と言わせた。

男は再び近づいてきた。

「クソ！何なんだよ」

俺は家に向かって走った。

だが家に行くときっきの奴と同じような奴のが数十人居た。

(どこへ行けばいいんだよ!?)

その時路地が見えた。

(あれを使うか)

だがもし前からもきたら挟み撃ちにされ自殺行為だ。

そこまで危険を冒したのは既に囲まれていたからだ。

路地に入ると目の前から奴らが来ないことを祈った。

神は俺に味方した。

無事に路地から出ると横からゾンビが飛びかかってきた。

押し倒されたが顔面にパンチを食らわせよるめいたところを逃げた。

目の前にコンビニが見えた。

とりあえずそのコンビニに入ることにした。

コンビニに入ると店員の服を着た奴が近づいてきた。

「クソ！ここもか」

俺は、そいつに飛び蹴りを浴びせた。

そいつが倒れている隙にコンビニの奥へ向かった。

P M 4 時

扉を開けると雪が降ってきていた。

さらに夕暮れに近づきつつある静寂を保つ世界を奴らが打ち壊した。  
そうゾンビだ……

外には二人の乗ってきた自転車があったが自転車は転けたりパンクした時に何かと不便なので歩いて和俊の家へ向かった。

周囲に居たゾンビは、ざっと10人。全員を倒すのは難しかったから避けながら走ることにした。

「和俊、翔、出来るだけゾンビは避ける！あと頭は狙うな！動きが封じられるからな。最低よろめかせるだけでいい」

俺が先頭に立ち走り出した。

バットで目の前に居たゾンビの腹に叩きつけた。

ゾンビは倒れ道ができた。

「行くぞ！」

三人は走り出した。

ゾンビ共を出来るだけ避けつつ、何とか和俊の家の前に着いた。

「早く来い！」

和俊が玄関の鍵を開け扉を開けた。

急いで中に入り鍵を閉めた。

「誰か居ないのか！？」

一階を捜すと誰も居なかった。

嫌な予感がした。

「おい！オヤジ、お袋、優樹菜」

優樹菜とは和俊の妹で今高1だ。

和俊の妹にしたら可愛い。

二階に上がって彼女の部屋に入ると入口にバットを持った優樹菜が立っていた。

## 第4章 到着（後書き）

当分最初に自衛官の話が入ってきますが主に3人の話です。



## 第5章 出発（前書き）

次回で自衛官と合流します。

## 第5章 出発

優樹菜はバットを振りかざし和俊を殴ろうとした。

「ま、待て俺だ！」

寸前のところでバットをとどめた優樹菜はバットを捨てた。

「何だお兄ちゃんか、奴らが来たと思って。そうだ、翼も翔も久しぶり！」

(相変わらずタメ口か……)

「そういえば二人は？」

「それが……外の様子がおかしいって事で様子を見に行ったらそれっきりで……」

部屋の椅子に優樹菜が座りながら言った。

目にはうつすら涙が見えた。

俺たちも床に座りながら話した。

「そうか……大丈夫だ！二人ともきつと生きている」

その時へりのローター音が聞こえた。

「何だ!？」

優樹菜の部屋からベランダに行き上を見た。

そこには自衛隊のへリが見えた。

種類は何か分からなかったが今はそんなことは関係ない。

救助が来たのだ。

「おい！助けてくれ！！」

他の皆も叫び続けたがへリはそのまま飛び去った。

「クソ！なんで気づかないんだよ」

部屋に戻り椅子を蹴った。

「ちょっと翼！それ私だよ」

（はあ、顔は可愛いのだが性格がなあ）

へりが去ってから再び話し出した。

「これからどうする？」

4人とも考え始めた。

「そうだ！まずはこの近くにあるコンビニに行って食料を探しに行こう」

この意見にみんな一致したが問題があった。

「誰が行くのよ。それに外には奴らが居るのよ」

翔が答えた。

「俺と翼で行こう。和俊と優樹菜はこの家で最新の情報と武器や食料を集めてくれ」

今度もまた意見は一致した。

その時喉の渇きに気づいた。

「和俊。何か飲み物はないか？」

「ああ、下に冷蔵庫がある」

4人で飲み物を取りに行った。

一階のキッチンにある冷蔵庫を和俊が開けると入ってる飲み物を全て出した。

3人は水やお茶などを飲む中、俺はレモンティーを取った。

「はあくこんな時までか」

翔が聞こえないぐらいで言った。

休憩を終え出発の準備をした。

カバンを持ちボコボコになった金属バットを持ち翔もボコボコになったバットを持った。

行こうとしたとき優樹菜に止められた。

「本当に行くの？」

「ああ、このままここに居ても食料は無くなる。なら略奪が来る前に手に入れたほうが良い」

それでも反論してきた。

「もし略奪されたり略奪者と鉢合わせしたらどうするのよ！」

「その時はその時だ。和俊！俺たちが行ったら鍵を閉めといてくれ。あと玄関の近くにいろよ。俺たちが帰ってきたらすぐ分かるように」

玄関に向かいドアの鍵を開けた。

最後にうしろを振り返ると優樹菜が「馬鹿じゃない」と言った。

イラッとしたが我慢して「行ってくる」&だけ言い家を出た。

同時刻・とあるコンビニ

中に居た奴らを何とか奥の部屋に誘き寄せ閉じ込めた。

その後モップの柄を折り武器とした。

(当分は大丈夫だがいつか食べ物尽きる……さてどうするか……)  
奥にあった椅子に座って菓子パンを食べながら思った。

さらに同時刻・あるへり内

そこに数名の自衛官……正確には元自衛官と一人の議員がいた。

「まさかこんなことが起きるとは、思いもせんかった。だがこれは利用できる。私が新たななる世界のトップになる時が来たのだ！」

議員は脱走した自衛官数名に言った。

(ちっ、うるさい奴だ。何が世界のトップだ。だがこれは楽しめそ  
うだ)

ある元自衛官の一人……天月光輝も何かを企んでいた。

## 第5章 出発（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

## 第6章 爆発（前書き）

今回クオリティー落ちてる。



## 第6章 爆発

PM4時30分

外に出てそばのゾンビを殴りつけ転けている隙に一番近くのゾンビに走った。

近づいてくるゾンビを何とか蹴散らしながら進んだが車が大破して炎上しており道を通れなくしていた。

そうこうしている内にゾンビ共に囲まれた。

「翔！ どうするんだよ！？」

翔は近づいてくるゾンビを吹き飛ばしてから言った。

「俺に考えがある！ まずはその家に入るぞ！」

翔が指さした家に走った。

ドアを開けようとしたが鍵がかかっていた。

「翔！ 駄目だ。閉まってる」

翔が追いついた。

「大丈夫だ。裏に回れ！」

裏に回ると行き止まりだった。

「翔！ 何が大丈夫だ、行き止まりじゃないか」

翔は落ちていた石を拾い近くの窓ガラスを割った。

「これでもか？」

「お前……そんな過激だったけ？」

その時ゾンビの呻き声が聞こえた。

「翼！ 早く入れ」

翔がやって来たゾンビ共を殴りつけながら言った。

ケガをしないよう来ていたダウンを使って窓のガラスの破片があるところに敷いた。

中に入るとすぐに翔も入ってきた。

そこはリビングのようだった。

「その窓を塞ぐぞ」

近くにあった机やタンスを使ってバリケードを造った。

だがこのままでは10分と持たないだろう。

「翔、さっき言ったた作戦は？」

翔は答えずにリビングから出た。

「お、おい。待てよ」

翔が向かったのはキッチンだった。

翔は全てのガスを全開にした。

「何する気だ？」

「ここを爆破するのさ」

翔の作戦とはまず玄関のドアを開けゾンビ共を中に入れ二階の窓からロープを使い脱出し、その後爆発させるというものだった。

だが問題があることに気づいた。

「どつやって爆発させるんだ？」

それで翔は苦笑いした。

「そうだった。やっぱり映画みたいには上手くいかないか……なんてね」

翔はタバコを取り出した。

「……まさかそれで爆発させようか……」

「そつだ。最低爆発しなくても二階から出ることができる」

「てかそれどこで拾ったんだよ」

「ああこれ、さっき道に落ちてた」

とりあえず玄関のドアを開けた。

「おい！ 腐ったゾンビ共！ こっちに来やがれ！」

案の定ゾンビたちはやって来た。

丁度リビングのバリケードも破壊された音がした。

急いで二階に上がり適当な部屋から持ってきたロープを垂らした。

「翔！ 先に行ってくれ」

翔がロープから降りると俺もロープに手をかけた。

その時ゾンビたちがやって来た。

「早くしろ！」

翔が下から叫んだ。

そこでようやく下に降りた。

タバコに持ってきたライターを使い火を点け窓の中に投げた。

幸いにも一階の窓に入れた。

「こつちだ！」

翔が走り出した。

俺も全力で走った。

その瞬間、背後で大爆発を起こした。

爆風で俺と翔は吹き飛ばされた。

気づけば俺たちは倒れていた。

幸い近くにゾンビは居なかったが、今の爆音ですぐにやってくるだろう。

翔も起き上がった。

「大丈夫か？」

翔を立たせた。

「ああ、それにようやくついたぞ」

翔が見ている方を見るとコンビニがあった。

「もう二度とこんなことはしたくないぜ」

「全くだ」

コンビニに入ると先客がいた。

「動くな！」

モップの柄を突きつけられた。

突きつけたのは男性で年は俺たちよりは年上でコンビニの店員じゃなかった。

「名前を言え」

「俺は遠藤翼でこっちが石井翔だ。貴方は？」

男はモップを降ろしてから言った。

「俺は神崎優斗……陸自隊員だ」

これが自衛官、神崎優斗との出会いだった。

## 第6章 爆発（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

## 突然の登場人物紹介

遠藤翼 18歳 O型

現在高3で来年から大学生。ゾンビ出現以前は高校野球のピッチャーであり5番でもあった。

ゾンビ出現以後はバットを使い、ゾンビ共を打ち倒している。和俊、翔とは小学からの親友。  
主人公。

神山和俊 18歳 O型

翼と同じで高3。テニス部に所属している。優樹菜は妹。  
3人のムードメイカー。

石井翔 18歳 A型

翼、和俊と同じく高3。バスケット部所属。学年一のイケメンと言われ告白されまくりだが誰かと付き合ってるということはない。結構過激。

神山優樹菜 16歳 O型

和俊の妹であり翼、翔とは昔から仲が良かった。  
翼、和俊、翔、優樹菜は全員同じ高校。ソフトボール部に所属する。

神崎優斗 25歳 B型

陸自隊員で成績優秀。休暇中に今回の事件に巻き込まれる。天月光輝とはライバル。

天月光輝 25歳 AB型

陸自隊員。神崎優斗のライバルである。今回の事件を使い何かを企んでいる。



謎の国会議員 不明 不明

今回のゾンビ出現を使って何かを企んでいる。ちなみに事件を起こしたのは彼ではない。

今回の事件はたまたま起こったことである。

## 突然の登場人物紹介（後書き）

御意見、御感想、御質問、御待しております。

## 第7章 新たな仲間

PM5時

「えーと神崎さんは、今起きてることが分かってないんですか？」

その後、何とか打ち解けた二人は、今起きてる現象が何なのかを神崎さんに教えていた。

「ああ、散歩に出たら外には変な奴が大量に居て襲われてそのままこのコンビニに来んだ」

「分かりました。とりあえず簡単に説明します」

その後、今外を歩いているのはゾンビで既に東京は奴らに壊滅状態にまでされたこと。

政府は沖縄に移動し、自衛隊は、重要な場所を守ることに精一杯で多分救助は来ないこと。  
などを話した。

「そうか……じゃあ今外に居るのは墓から蘇ったゾンビで救助に来ることはまずないということか」

神崎は何かを考え始めた。

と、そこで大事なことを思い出した。

「そつだ神崎さん。実は俺たちここに食料調達に来たんですけど」

「ああ、良いよ。ただし条件がある」

(条件……?)

「何ですか？」

「俺も一緒に行っていていいか？」

一瞬思考が止まった。

「何だそんなことですか。良いですよそれぐらい」

「じゃあそうと決まれば食料を集めるぞ」

その後店内の生物以外のものを集めた。

集め終わると入口のところに集まった。

「じゃあそろそろ行きますか……」

翔が言った。

「俺が先に行くから二人はあとからついてきてくれ」

そう言うと神崎は先に行った。

「俺たちも行くぞ！」

神崎の背中を追いかけながら近づいてきたゾンビたちをバットで殴った。

そこで気づいた。

(そういえば神崎さん。和俊の家知らないんじゃない……)

「神崎さん！止まってください」

神崎が立ち止まるとゾンビたちが近づいてきたから早口で言った。

「俺が先に行きます」

それだけ言うと走り出した。

先程の爆音でゾンビが大量に集まっていた。

一体のゾンビの頭を叩き割るとゾンビが俺に噛みつきこうとした。

「なめんじゃねー！」

右足でゾンビの腹を蹴り、よろめいたゾンビの顔面をバットで殴った。

周囲を見渡すと囲まれていた。

二人とも集まってきた。

「どっするっ？」

翔が近づいてきたゾンビの頭をバットで殴りながら言った。

「俺に考えがある。まずはあのガソリンスタンドに行け！」

神崎が言ったガソリンスタンドはすぐのところにあった。

ゾンビ共を殴りつけながら俺は気づいた。

殺すことに戸惑いがなくなったことを……

ガソリンスタンドに着くと神崎さんはライターを取り出した。

「翔はそのガソリンを辺りにばらまけ！翼は援護しろ！」

言われるままに翔はガソリンをばらまき俺はゾンビを倒し続けた。

油断してた……というわけではない。だが少し甘かった……考えが

……

死んだと思っていたゾンビが生きていたのだ……

「危ない！！」

翔の叫び声が聞こえた。

ゾンビが立ち上がり噛みつきこうとした。

防ごうとしたが違うゾンビも近づいてきた。

(やられる……)

死を覚悟したがその時、二度銃声が聞こえた。

噛みつかれた痛みは来なかった。

おそるおそる顔を上げると拳銃を持った男が居た。

## 第7章 新たな仲間（後書き）

御意見、御感想、御待しております。



## 第8章 二度目の爆破（前書き）

どんどんとクオリティーが落ちてきている……

## 第8章 二度目の爆破

PM5時

拳銃を持った男はさらにゾンビに発砲した。

ゾンビの頭には当たらないものの立ち直る時間稼ぎにはなった。

「急いでこっちに来い」

神崎さんがうしろから叫んだ。

回れ右して行きそうになったが男性のことを思い出した。

「あなたも来てください」

男は頷くと走り出した。

戻ると神崎さんはライターを持っていた。

(まさか……)

そうここを爆発させようとしているのだ。

神崎さんは俺たちに下がらせた後ライターを点けながらガソリンがばら撒かれてるところに落ちた。

その後のことはよく覚えてない……走りながら背後で大爆発が起き、俺の意識が無くなった。

P M 5時20分

ふと気がつくのと辺りは暗闇に包まれていた。

時計を見ると5時20分だった。

（なぜこんなことに……そうだ！ 確かガソリンを使って爆発させたんだ）

周囲を見渡すとゾンビ共は歩いてなくガソリンスタンドは燃えていた。

その後、翔や神崎さん、俺を助けてくれた人を起こした。

「みんな怪我は無いな……てそういえば名前は？」

俺を助けてくれた人に神崎さんが聞いた。

「俺の名前は須藤健太……元ヤクザだ」

須藤健太さんの話はこうだった。

ゾンビが出現する前の日に仲間とのトラブルから殺害。その際に拳銃を奪って逃走して今までずっとこの辺りに潜伏していたとのことだ。

「そうだったんですか」

ヤクザと聞いて一瞬驚いたが自分を助けてくれたことを思い出した。

「須藤。お前も俺たちと一緒に来るか？」

須藤は悩んでる様子だったがすぐに答えた。

「分かった。ここにも別に何の得も無いからな。今は誰かの役に立ちたい」

(ヤクザだけど意外と良い人なんだな)

「じゃあ行きますか！」

新たに増えた二人の仲間と共に和俊の家へ向かった。

PM 5時30分

「急げ!!」

ゾンビ共が近づいてくるのを防ぎながら須藤が言った。

須藤は拳銃を持っているのはいいが腕はあんまり良くないことが分かり神崎さんに渡していた。

だから須藤はモップの柄を使いゾンビ共を近づけないようにしていた。

神崎さんが拳銃を使って近づいてくるゾンビの頭を撃ち抜いた。

だがゾンビは多すぎた。

「駄目だ。このまま家に入れば奴らに居場所がバレる」

須藤が言った。

「ともかく消防署に入れ！」

消防署は近くにあった。

4人はゾンビを倒しながら消防署に入った。

「扉を閉める！」

急いで入ってきた扉を閉めバリケードを造った。

「これで一安心だな……」

その時背後から気配を感じ振り返ると消防士の服を着たゾンビが立っていた。

「神崎さん」

神崎は振り向くとゾンビに向け発砲した。

銃弾はゾンビの頭を撃ち抜きゾンビは倒れた。

「本当の一安心だな……」

奥から大量の呻き声が聞こえた。

それは大量のゾンビが中に居ることをしめしていた……

## 第8章 二度目の爆破（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第9章 作戦会議（前書き）

最近グダグダになってきた……



## 第9章 作戦会議

多数のゾンビのうめき声が奥から聞こえた。

その時ゾンビが奥の暗闇から出てきた。

「クソ！ ゾンビだ！」

神崎が拳銃で撃とうとしたが弾が切れていた。

「何だと！？ なめやがって」

神崎はゾンビの腹に蹴りを浴びせた。

ゾンビは倒れ俺がバットで頭を叩き割った。

「俺が先に行く」

神崎は須藤が持っていたメリケンサックを持って歩きだした。

神崎の背中を追いながら出てきたゾンビを倒していった。

その時扉を見つけた。

「神崎さん！ 扉があります」

神崎は戻ってきて慎重に扉を開けた。

中は食堂の様なものでゾンビは居なかった。

「ともかく何かないか捜そう」

結局何もなく時間を無駄にただけだった。

「どうしますか？」

翔が全員に聞いた。

「どうするも何もここから脱出するだろ」

俺の言ったことに翔はため息をついた。

「翼、俺はどうやってここから脱出するかを聞いたんだよ」

その時須藤が口を開いた。

「俺に考えがある……下の消防車を強奪すればいい」

だがそれには欠点があった。

「どうやってそこまで行くんですか？ それに消防車なんて使って家に戻ったらゾンビ共に居場所がバレるんじゃないんですか？」

それでも須藤には考えがあった。

「まず消防車を取りに行くのは外に出る必要はない。滑り降りれば良いんだからな」

そういえば消防士は緊急の時は下に滑り降りて出勤するのを思い出

した。

「あとバレても良い方法がある」

須藤が話すことはこういうことだ……

まず消防車で和俊の家に向かい玄関を消防署で通れなくしてから中に入る。

その後二人と合流してから家中の食料を集め消防車に乗りどこかへ逃げるというものだった。

「だけどどこに逃げるんだ？」

神崎が須藤に聞いた。

「いくつか候補がある。警察署、近くのホームセンターやショッピングモールぐらいだな」

（警察署は駄目だ。こんな時は大抵警察署は機能を停止している。ショッピングモールも大抵の場合ゾンビが集まってくるから駄目だ。ならホームセンターしかないじゃないか）

「ホームセンターで良いと思います。あそこなら武器がありますし食料は近くから集めておいたら良い思います」

その意見に全員が賛成した。

「よし！ なら出発だ」

神崎が前に立ち慎重に扉を開けた……

## 第9章 作戦会議（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

## 第10章 さらば……

PM6時

作戦が決行される……

神崎が扉を開けるとゾンビが一人近づいてきた。

「来んじゃないー！」

神崎はゾンビの顔面を殴ってから先に進んだ。

ゾンビ共は俺たちを襲ってくるが何とか凌いでいった。

そしてようやく目的地に着いた。

「早く降りろ！」

須藤、翔の順番で降りていった。

最後は俺と神崎だけになった。

「お前も早く行け」

それは一瞬だった……暗闇から突如現れたゾンビが神崎の腕に噛みついたのだ。

「神崎さん……！」

俺はバットでゾンビの頭を殴りつけ殺した。

それを皮切りにゾンビがどんとやって来た。

「クソ……俺は噛まれた……翼……行くんだ……俺はここに残る」

神崎が床に座り腕を押さえながら言った。

「でっ、でも……」

「でもない！ お前は俺が来ないことを二人に言って逃げる…

…」

ゾンビは5m近くまで来ていた。

「分かりました……神崎さん！ 今までありがとうございました」

それだけ言つと耐えられなくなり下に滑り降りた……

side 神崎優斗

「さて……ここは通さねーぞゾンビ共！」

死ぬ前にせめて彼らの時間稼ぎをしようと思つた俺は感覚が無くなつてきた腕を抑え先頭の一体に飛び蹴りを食らわせた……

side 神山優樹菜

優樹菜は玄関で二人が帰つてこないことにいらついていた。

（ハア〜まだ帰って来ないの……もしかしたら……翼……）

その時車の音が外から聞こえた。

「お兄ちゃん！」

すぐに兄の和俊がやって来た。

「どうした……この音は何だ？」

「それが……分からないの。とりあえず外に出てみよう」

慎重にドアを開けると通りの向こうから消防車がやって来た。

運転席には知らない男が乗ってたが助手席にはよく知っている人物……翼がいた。

その時ゾンビが私に近づいてきた……

side 遠藤翼

あの後……消防車に乗りながら翔や須藤さんに神崎さんに起こったことを話した。

二人とも困惑していた。

知り合って数時間だけどそれでも彼のおかげで助かったことだってあった……

「おい、翼。こっちで良いんだな」

須藤さんの言葉で我に変わった俺は頷いた。

それにしても道路は地獄だった……

ゾンビや壊れた車などが道を塞ぎ遠回りをしたりした。なぜゾンビを轢き殺さないかというゾンビを轢いた時の血でスリップする危険性があったからだ。

ようやく家が見えた。この通りにはゾンビは数名しかいなかったがうしろからゾンビが着いてきているのがサイドミラーで見えており着いたらすぐに出発しないと囲まれるだろう。

その時家の扉が開いた。

（あれは……優樹菜！）

その時優樹菜にゾンビが近づいて行くのが見えた……



第10章 ささらば……（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

## 第11章 ホームセンターへ(前書き)

クオリティーが最近ひどくなってきた……

## 第11章 ホームセンターへ

ゾンビが優樹菜に近づいて行って……

「優樹菜！！ 逃げろ！！」

俺が叫んだ。優樹菜は既に気づいてる様で急いで中に戻っていった。

「急いでください須藤さん」

「ああ、任せろ」

須藤はアクセル全開で飛ばし一気に家に着いた。外に出て家の前に居るゾンビの頭をバットで殴りつけた。良く見るとこのゾンビは俺の家の近所に住んでる人だった。

「翼！ 早く中に入れ！」

二階のベランダから和俊が言った。急いで3人で中に入ると優樹菜が立っている。

「おかえり！ 翼、翔……誰？」

優樹菜はこんな時でもいつもどおりだ。

「俺は、須藤健太だ」

そこまで話して和俊が降りてきた。

「帰ってきたか。翼、翔……誰？」

（全くこの兄弟は……）

「和俊、優樹菜、急いでここを出る。家中の食料を集めてくれ」

二人は何も聞かず言われたことを始めた。

俺も冷蔵庫に入っている食料や飲み物（俺の場合、ティー）をカバンに詰めた。

大体、入れ終わると急いで5人で外に出た。

「何だよこれは……」

大量のゾンビが通りに集まっていて消防車に近づいてきた。

「逃げ！」

須藤が消防車に乗り込んだ。

俺が助手席に座り3人はうしろに乗った。

「早く出してください!!」

「駄目だ、エンジンがかからない！」

須藤は必死にエンジンをかけようとするが全くかからない……

そしてゾンビ共はどんどん近づいてきているのがバックミラーで見えていた。

（もう駄目だ……）

その時奇跡が起きた。

「よし！！ 良かったぞ！」

エンジンがかかり消防車は出発した。

腕時計を見ると7の数字を指していた。

「そういえばこれからどうするの？」

うしろから優樹菜の声が聞こえた。

そういえば説明してないことに気づいた。

「ああ、今からホームセンターに行く。あそこなら武器もあるし入口を閉じればまあマシだろう」

「けどいつかは食料は無くなるわよ」

「それは近くのコンビニやスーパーから奪ってきたらいい」

辺りはすっかり暗闇に包まれており眠気に襲われた。

そんな中今までのことを思い返していた。

（なんでゾンビが現れたんだ？ だって理由があるはずだろう。それに自衛隊が救助に来ないってどういうことだよ……やばい……眠たくなってきた……）

俺は眠り始めた……

**第11章 ホームセンターへ（後書き）**

御意見、御感想、御待しております。

## 第12章 自衛隊

PM8時

「おい翼。起きろ」

突如誰かに起こされた。

(あれ誰だ……そういえば！)

一瞬はつきりしなかったが声は須藤さんのものだった。

「どうしたんですか？」

寝ぼけながら腕時計を見ると針は8を指している。

「いや、起こそうか迷ったんだが……もうすぐで着くぞ」

良く考えればホームセンターはすぐ見えていた。

だがホームセンターの駐車場はゾンビに埋めつくされている。

「そういえば後ろの3人は？」

「ああ、翼が寝てからちよっとして眠ったぞ」

まあそれが普通だろう。こんな極限状態の中疲れない訳がない。

(こんなの10キロぐらい走ったほうがマシだろ……)

そこまで考えて気づいた。

（須藤さんはずっと俺たちと一緒に行動している。俺を助けたのは何故なんだろう？）

「そつえば須藤さん。最初に出会った時なぜ俺を助けたんですか？」

この際聞いてしまったほうが気が楽だった。

「それはだな……」

須藤さんが答えようとした時、駐車場に入った消防車に気づいたゾンビ達が消防車に突進してきた。

「クソが!!」

須藤さんは必死にハンドルを切ろうとしたが少し遅かった。見事にゾンビ共に突っ込んで行き止まった……そしてゾンビたちは完全に消防車を囲んだ。

「マジかよ……死亡フラグじゃねーか！」

（ホームセンター屋上）

「隊長。駐車場に生存者が来ましたが？」

隊長と言われた男……灰原智2等陸曹は答えた。



「今すぐ彼らを援護しろ。例の作戦を実行するには多くの人員が居る」

俺……古澤剛二等陸士は対人狙撃銃を持ち消防車に群がっているゾンビを撃てる位置に立った。

隣では相沢優香二等陸士が既に狙撃を始めている。

「待たせたな、優香」

「ああ剛、早く手伝って」

他の仲間も狙撃を始め俺も始めた……ゾンビ狩りを……

（消防車内）

突如ゾンビの一人が倒れた。それを皮切りにゾンビたちは次々と倒れていった。

「何だ！？ 何が起きている？」

やっと後ろの奴らが起きた。

（こんな時にのんきに寝てやがって……）

その時かすかだが銃声のような音が聞こえた。

「須藤さん！ あれを……」

暗くて良く分からなかったがホームセンターの屋上に数名の男女が立っていた。

手に持っているのは銃に見えた。

「須藤さん、助かりましたよ」

「ああ、そのようだな」

ゾンビが少なくなってきたおかげで消防車は動き始めた。

「ねえ……何があったの？」

後ろの奴らはまだ分かってないようだ。

（この際教えない方が良いな。それにしても彼らには感謝しなければ……）

消防車はついにホームセンターの入口に着いた……

## 第12章 自衛隊（後書き）

今日はきりが悪いけど次回に繋げるか

### 第13章 合流

俺たちを乗せた消防車は入口に着き、外に出たが自動ドアは開かない……

「クソ！！ゾンビ共が来るぞ！！」

須藤さんが消防車を蹴った。

いくら狙撃してもらってるからって敵の数は一向に減る様子を見せない。

その時自動ドアが開いた。

「急げ！ 中に入れ！」

俺が皆を中に入れると案の定奴らは着いてきた。だが自動ドアは閉まるとそのまま開かず、さらには強化ガラスだったため完全に入れなくてあった。

(どうということだ……？)

とりあえず一階を見たら大量のゾンビがいた。

「ゾンビだ……」

奴らにバレないように小声で言った。周囲を見渡すと階段がある。

「あれを使おう」

階段の隣にはエレベーターがあったが、死亡フラグが立ちそうだから止めておいた。

階段を上がって二階に着いた。二階もゾンビ共の巣窟となっていた。屋上に続く階段の前に立入禁止と書かれたやつがあったが無視して階段を上った。

ようやく屋上に着き、須藤さんが慎重に扉を開けた……

扉の先には5人の男女がおりその一人が銃を向けてきた。

姿から見て自衛隊だろう男女は引き金に指をかけた。

「待て！ 俺たちは人間だ！」

須藤さんの訴えにも関わらず男は引き金を引いた。

( 殺される…… )

今日何回目かの死を覚悟した……が想像していた痛みは無かった。

後ろで「ドサツ」と何かが倒れる音がした。

振り返るとゾンビが一人倒れていた。

多分俺たちを追ってきたんだろう。

「油断は死を招くぞ」

銃を向けていた男が言った。

その時後ろで翔と和俊が話している事が聞こえた。

「でさああの人が持っているのは89式小銃で」

「ふーん、翔ってまさか軍オタ？」

(……二人はほっておこう……)

「あんだ達の名前は？」

須藤さんが話を本題に戻した。

「ああ、俺は陸上自衛隊第一師団所属、灰原智二等陸曹だ。この隊の隊長を務めている」

俺たちに銃を向けた男が答えた。

「同じく古澤剛二等陸士だ」

背の高い眼鏡をかけた男が答えた。

「私も同じく相沢裕香二等陸士です」

どちらかという小柄で顔も可愛い女性が答えた。

その後二人の自衛官も挨拶をし、自衛官たちの紹介が終わった。

「で、そちらは？」

灰原智と名乗った男が言った。

「俺は須藤健太で隣に居るのが遠藤翼、後ろの3人が石井翔、神山和俊と神山優樹菜だ。」

「この二人は兄弟だ」

こちらの挨拶も終わると灰原さんが口を開いた。

「実は君たちに協力して欲しいことがある」

「何ですか？ 協力できることならしますよ」

俺が答えると彼が言った。

「この建物内に巢食うゾンビ共の掃討作戦を手伝ってほしい」

彼が言うには現在、中には大量のゾンビが居てこのままでは下に降りれない状態だそうだ。

だから下に居るゾンビたちを全滅させようという考えだ。

この提案に須藤さんは答えた。

「少し考える時間をくれ」

「分かった。屋上は自由に使ってもいいが下には降りるなよ」

一旦話し合いは終了して5人でどうするかを言い始めた。

「お前たちはどうしたいんだ？」

「私は反対よ。そんな危険を冒すようなマネはしたくないわ」

優樹菜が反論した。

「そうだ。何も死に急ぐような事はしたくない」

和俊も反論してきた。

(全くこの兄弟は……なんでこんなに意見が合うんだ?)

この二人に疑問を持ちながら俺も意見を言った。

「俺は賛成です。なぜなら今ここで提案を拒否したら多分俺たちは追い出される」

「どうして分かるの？ 自衛隊がそんな事する分けないじゃない」

優樹菜の反論に答えに困った俺に翔が助け舟をだした。

「俺もあの提案に賛成だ。たしかに彼らは自衛隊だ。だが既に世界は崩壊に向かって進んでいる。」

今までの常識はもはや通用しない。それに彼らと行動することで生き残る確率は上がるしな」

「しかたないわね」

優樹菜が認め、和俊も渋々認めた。

そこまで見守っていた須藤さんが口を開いた。

「なら決まりだな」

この時は考えもつかなかった……この決断が壮絶な戦いの始まりとなる事を……



### 第13章 合流（後書き）

ご意見、ご感想、お待ちしております。

第14章 掃討作戦（前書き）

今回ひどいな……

## 第14章 掃討作戦

PM 8時30分

掃討作戦を手伝うことにした俺たちはそれを伝えに行った。

「灰原さん」

灰原は銃の整備をしている。

「何だ？」

「決めました。手伝います」

「本当か！？ ありがとう」

灰原さんと握手し作戦開始時刻のAM 4時を言われ話は簡単に終わった。

さっきの場所に帰りながら疑問に思ったことを言った。

「何で朝の4時何でしょうね」

それに優樹菜が答えた。

「そんなことも分からないの？」

（なっ！？お前は分かるのか）

「お前は分かるのかよ？」

優樹菜に負けた動揺を隠しながら言った。

「それはね……須藤さん、私の代わりに言って」

須藤さんは突然話を振られたため慌てる様子を見せた。

(てか自分も分からないんじゃないか……)

「何で優樹菜が言わないんだ？」

優樹菜は明らかに動揺した様子で言った。

「そっ、それはね……」

(やっぱり分からないんじゃないか)

見事、優樹菜に勝利し話を元に戻した。

「で、何でAM4時何でしょうね？」

これには須藤さんも含め誰も分からなかった。

(優樹菜は論外だが……)

先程の事も少しイライラしている優樹菜の方をチラッと見ながら思った。

その時、自衛官の一人が近づいてきた。

(確か名前は……古澤さん！)

「古澤さん！ 丁度いいところに来ましたね。何で作戦開始時刻が朝の4時何ですか？」

古澤さんは丁寧に教え始めた。

理由は、1つ目にまず今からだだと全員が疲れきってるので休まなければならぬ。

2つ目は4時だとまだ外も暗くゾンビに居場所が悟られにくい。反対にこちらは暗視ゴーグルを持つてるから関係ない。

そこまで聞いて疑問に思った事がある。

「ゾンビは目が見えないのでは？」

「ああ、だが念には念をな」

話も終わり持ち場に帰ろうとする古澤さんをもう一度止めた。

「あと一つだけ分からないことがあるんです。聞いても良いですか？」

「ああ、俺に答えられることなら」

「じゃあ、何で自衛隊がここに居るんですか？ 確か自衛隊は沖縄や発電所を守ることが任務じゃないんですか？」

「そつえば言っただけな。俺たちが何でこんなところに居るか

といつと……」

古澤さんの話が始まった……

## 第14章 掃討作戦（後書き）

次回、自衛隊の話です。

## 第15章 数時間前？

東京都 学校の屋上 PM1時

(全く……今起きてることは、現実なのか……)

俺……古澤剛二等陸士は、灰原智二等陸曹が率いる陸上自衛隊第一師団に所属している。

現在、避難所とされる学校へ向かい、市民を基地に運ぶ任務を行なっている。

なぜこんなことをしてるかという、奴らのせいだ……

死んだはずの人間が蘇り人を襲う……

そんな映画みたいなことがあるわけない……

最初はそう思っていた。だが今は、そうは思わない。

なぜなら今も門を破ろうとゾンビたちが来ているからだ。

その時、後ろから肩を叩かれた。

つい反射的に拳銃を構え振り返った。

そこには、俺と同じ隊に所属する相沢優香二等陸士が居た。

「お前かよ……」

優香はふてくされた様に言った。

「私で悪かったわね」

答える前に10人ぐらいの小学生が来たから、CH147J輸送ヘリ・チヌークに乗せた。

「それで……何だ？」



「それはね……」

最後の方はチヌークの飛び立つ音でかき消された。

その時、何かが倒れる音が下からした。

急いで柵から見ると、死者が門を破って侵入してきた。

「不味いな……」

急いで無線で全員に言った。

「死者が門を破り学校内に侵入！！ 繰り返す。死者が学校内に侵入！！」

灰原隊長から無線が返ってきた。

『分かった。急いで市民を全員避難させる！』

既に第一師団のほとんどの者が屋上に集まっている。

隊長がやって来て言った。

「屋上から死者を狙い撃て！」

この命令に俺は戸惑った。

奴らは死者とは言え、元は人間……俺には無理だ……

ほとんどの者がこの命令に戸惑い始めた。優香もどうするか迷っている。

その迷いを、灰原隊長が打ち消した。

「お前達！！ 今ここで死者に侵入されたら市民が死ぬんだぞ！  
お前たちは自衛隊だろ！  
自衛隊は市民を守るのが任務だ。それを行わなかったらお前たちは  
自衛隊じゃ無い！！」

それで迷いは吹っ切れた。

対人狙撃銃を持ち柵の前に立ち、死者に発砲した。

一度誰かが発砲したら、他の者も同じように始めた。

（さすが灰原さんだ）

こうして順調に市民はへりに乗り込んでいった。  
だが最後の10名のところで異変が起こった……

『死者出現！！ 数は、数十人！！ クソ、食い止められない……  
うわーーーー！！』

無線から悲鳴が聞こえた。

（死者がここに来る……）

今、屋上に居る自衛官全員が階段へ戻った。

ここで死者を待ち伏せする作戦だ。

『死者は、3階を突破！！ もうすぐここに来る！！』

この建物は3階建てだ。そして俺たちは4階の階段にいる。  
もうすぐ死者はやって来る……  
その時、死者が見えた。

「死者を確認！ 撃てー！」

死者は階段を登ってくるのだが大量の5.56mm弾のシャワーを浴び、近づけて無い。

だが死者は、圧倒的な数で登ってきている。撃ってる時は良いが、弾切れになると近づかれる。

(時間との勝負だ……)

最後の手段を使う事にした。

「お前たちは先に行け。良い考えがある」

「ですが……」

「良いから……」

自衛官たちは屋上に戻ったが優香だけは残った。

「どつするの？」

「どつするのさー!!」

06式小銃で弾を89式小銃の銃口に取り付けて引き金を引いた。死者に命中して爆発が起きた。

煙で前が見えなくなったが次に見たときは、死者は爆発で消えた。

「優香、行くぞー！」

「ええ」

優香を連れて屋上に戻ると最後のへりが飛び立った後だった。

「隊長、俺たちはどうするんです?」

「大丈夫だ、もうすぐへりが来る」

無線から声が聞こえた。

『こちら司令部。残念ながらへりが出せない。この現象が世界中で起き始めた』

何か言う前に無線は消えた。

俺たちはここに取り残されたのだ……

## 第15章 数時間前？（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

**第16章 数時間前？（前書き）**

今回で自衛隊の話は終わりです。

## 第16章 数時間前？

へりは来ない……それは学校に見捨てられたという事だ……  
他の隊員の顔色を見ると顔が青ざめている……

「隊長。命令を」

灰原隊長は迷いながらもこう言った。

「今すぐ学校を脱出し他の部隊と合流する」

それで目的は決まったが、どうやって脱出するかが問題となった。  
今ここにある武器は全員分（6人）集めて89式小銃が5挺、5・  
56mm機関銃MINIMIが一挺、対人狙撃銃が  
全員分ぐらいしか無い。

その時アイデアが思いついた。

「隊長。この学校にある車を使いましょう。それに学校の門を出た  
所にバスがありましたし」

「だが鍵が無いぞ」

「それなら大丈夫です」

隊長の問いに答えずに校内に戻った。手には89式小銃、対人狙撃  
銃も肩にかけている。

下は地獄だ……多数の死者が徘徊している。  
幸い俺に気づいた奴は居ないらしい。

後ろから優香や隊長、他の隊員も来た。

「さて今から一気に一階まで行って外に出る。そして門の近くにあるバスへ走る」

隊長が言ってきた。他の隊員の顔に緊張が表れる。

「よし……行け！」

俺と優香がまず三階に降りた。近づいてくる死者共に5・56mm弾を浴びせながら2階に降りた。

「足、引つ張らないでよね？」

「こっちの台詞だ」

近づいてくる死者は思ったより数が少ない。

（何故だ……？）

突如目の前に死者が立ち塞がった。引き金を引いたが弾切れだった……

（ふざけんじゃねえ）

89式小銃で死者の頭を殴る。

一瞬の隙でさらに落ちていたバットで頭に渾身の一撃を加えた。一息つこうとするがすぐに死者はやって来る……

「早く！」



優香は、先に運動場に出ている。  
俺もすぐに運動場に出ると絶句した……  
死者の数は数え切れない程居る……まるで酔っ払いの大群だ。  
全員が肉は腐っておりゆったりとした足取りでフラフラさまよっている。

「止まるな。逃げ」

後ろから灰原がやって来た。俺と優香は急いで門に向け走った。

(弾を入れる暇は無い……なら！)

走りながら06式小銃で弾を取り出し89式小銃の銃口に装着した。

何とか死者たちを突破し門の近くまで来た。だがそこには多数の死者が待ち構えている。

まるで待ち伏せしているように……

俺は06式小銃で弾を発射した。

それは一体の死者の腹に当たり、周りの奴も巻き込んで爆発した。

爆風に煽られ目を閉じる……再び目を開けると死者はほとんどが倒れていて生きている者も地面に這いずっている。

再びバスに向け走り出した。

バスの中に入ると鍵はやはり無かった。

「どうするんだ？」

灰原がやって来て言った。

「任せてください」

俺は鍵を使わずにエンジンをかける方法を知っている。  
それを使ってエンジンをかけた。

「……まあ良い。急いで出発するぞ。古澤は運転しろ」

俺はアクセルを踏んだ。バスは出発した。

「どこに行くんです？」

「とりあえず近くのホームセンターに向かえ。あそこは頑丈な建物だ」

その時は気づいていなかった。彼らのバスをじっと見つめる数人の死者が立っている。

それらの死者の目は黒かった……

**第16章 数時間前？（後書き）**

御意見、御感想、御待しております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2005z/>

---

そして世界が終わった頃に.....

2012年1月6日07時45分発行